



HAL
open science

日本列島の言語の多様性：琉球諸語を中心に

Thomas Pellard

► To cite this version:

Thomas Pellard. 日本列島の言語の多様性：琉球諸語を中心に. Takubo, Yukinori. 琉球列島の言語と文化：その記録と継承 Ryūkyū rettō no gengo to bunka: Sono kiroku to keishō [The languages and culture of the Ryūkyū archipelago: Their recording and transmission], Kuroshio shuppan, pp.81–92, 2013, 9784874245965. <hal-01289782>

HAL Id: hal-01289782

<https://hal.science/hal-01289782v1>

Submitted on 26 Oct 2016

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.



Distributed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License

日本列島の言語の多様性

——琉球諸語を中心に——

トマ ペラール
Thomas PELLARD

田窪行則（編）2013『琉球列島の言語と文化——その記録と継承——』東京：くろしお出版，81–92

1 世界のことばの危機

世界の中には 6000～7000 の言語があると言われていたが、100 年以内にその半分以上が完全に消滅してしまうことが予想されている (Krauss 1992)。世界の言語多様性が減少してゆく中で、日本も例外ではない。標準日本語はおそらく生き残るだろうが、アイヌ語や各地の伝統的なことばは消滅の危機に瀕している。

1.1 言語多様性の重要性

言語の多様性を重大な問題として取り上げる研究が近年多くなってきた。その理由はいろいろあるが、まず言語とはそれぞれの地域が持つ独自の伝統文化の一部であり、重要な文化財であることが広く認められてきたからであろう。また、言語は人間のアイデンティティに深く関わっており、それに関連して最近、国際法で人権の一つとして「言語権」が認められつつある。言語権というのは、言語を自由に選択し、次世代へ継承し、さらに立法・行政・教育・メディアで使用する権利のことである。

一方、学問の観点から見ても、言語の多様性が非常に重要であることが強調されている。世界の諸言語に観察される音や文法構造は様々で、よく知られている標準日本語や英語のようなメジャーなことばだけを基にして、人間の言語の性質と仕組みを論じるのは危険である。まだ研究されておらず今消えようとしている言語の中に誰も想定しない未知の現象が潜んでいる可能性が非常に高い。また、中央方言では消えてしまった古い特徴が「周辺の」な地域のことばに残ることがよくある。

2 日本の危機言語・方言

2009年にUNESCO（国連教育科学文化機関）が日本に消滅の危機に瀕している言語が8つもあることを認定した。アイヌ語の例はよく知られているが、そのほかに八丈島の八丈語と琉球列島の奄美語・国頭語・沖縄語・宮古語・八重山語・与那国語が取り上げられた。またUNESCOには取り上げられなかったが、本土の言語多様性も危機に瀕しており、日本語の多様な伝統方言も消えつつある。

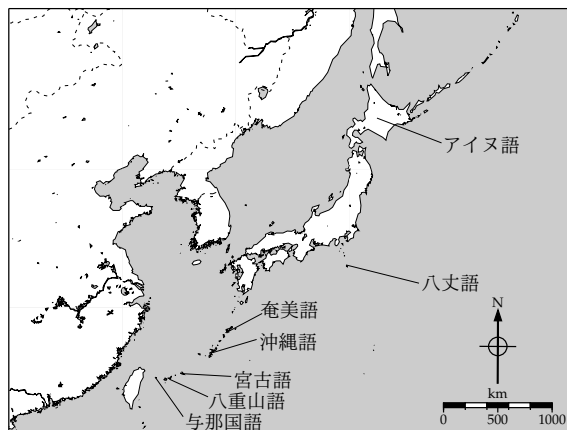


図1 日本列島の危機言語

2.1 「言語」と「方言」

UNESCOは日本の一般的な認識とは異なり、上記のことばを日本語の方言とは扱わず、日本語と異なる個別の言語とみなしている。方言と言語の区別は簡単な問題ではなく、政治や歴史の背景が必ず深く関わってくる。特に日本の場合場合、日本は一文化・一民族・一言語の国だという考え方がいまだに根強く、多様性そのものが否定されることもある。しかし琉球諸語の合、1872年まで琉球王国という独立の国家が存在し、本土とは大きく異なる独自の文化が琉球列島の中で形成された球列島の中で形成されたことから、琉球の島々で言語・文化が多様に発達したことは否定できないことは否定できない。

「方言」と「言語」を区別するために「相互理解性」という基準を利用するのが一般的である。すなわち、二つの言語体系がお互に通じない場合はそれらが同一言語の方言ではなく別の言語と考える。しかし、アイヌ語とは違って系統的に日本語と近い関係にある琉球列島や八丈島のことばでも本土のどの方言とも通じない。例えば琉球列島の最北の喜界島とそのすぐ北

にあるトカラ列島や九州の方言とは大きく異なっており、相互理解が不可能である。さらに、琉球列島の中でもことばが通じない地域が存在している。

琉球諸語は基礎語彙を 80~85% 共有している一方、日本語とは 70% ほどしか共有していない（大城 1972）。琉球諸語と日本語とのこの距離はロシア語・ポーランド語・ブルガリア語・セルビアクロアチア語等を含むスラヴ語族内の多様性に近い。また、ドイツ語とオランダ語との距離やスペイン語とポルトガル語との距離よりも大きい。

3 「日琉語族」について

以上のことから、複数の「琉球諸語」を認め、日本語を単一言語ではなく多様な語族とみなし、「日琉語族」*1 という名称を使った方が妥当と思われる。UNESCO は 6 つの琉球語を取り上げているが、これは広く知られている上村 (1997) 等の分類・区画によると思われる。しかし、琉球諸語の系統分類に関する近年の研究によって UNESCO の言う「国頭語」が歴史・系統的に一つの分岐群ではないことが明らかになっている（ローレンス 2006, Pellard 2009, to appear）。すなわち上の分類で国頭語に含まれていた南奄美諸方言が奄美語に、北沖縄諸方言が沖縄語に属するのである。

一方、八重山諸島の中に相互理解を欠く方言が存在することも報告されており*2、おそらく「八重山諸語」を認めるべきである。筆者はとりあえず奄美語・沖縄語・宮古語・八重山語・与那国語という 5 つの琉球語を認める立場をとっている。八丈語も認めるが、その系統的な位置はまだ明らかにされていない。

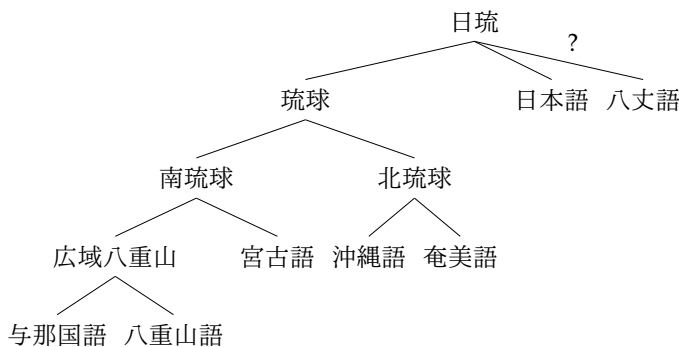


図 2 日琉語族の系統図

*1 英 the Japonic language family, the Japonic languages.

*2 筆者の現地調査と麻生玲子からの私信。

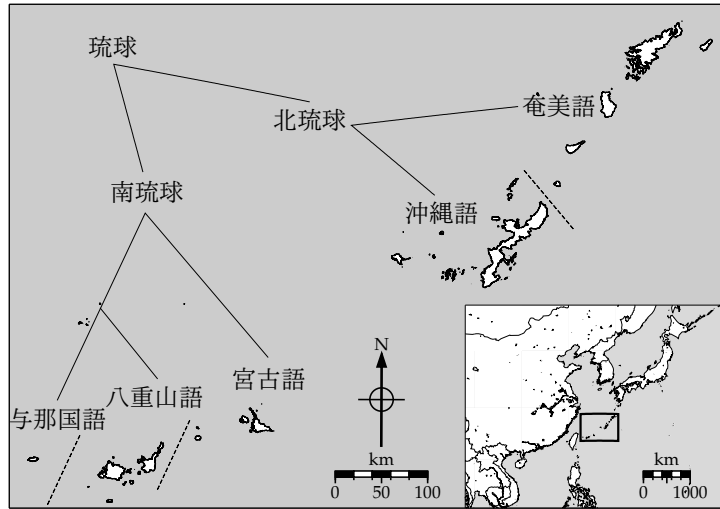


図3 琉球諸語

4 多様な琉球諸語

4.1 琉球諸語とは

琉球諸語は九州の南から台湾の北端まで、800キロメートル長の海の間には散らばり、黒潮の潮流によって区切られた琉球列島で話される固有の言語である。琉球諸語と日本語との間に数多く見出される語彙と文法上の対応関係は、明らかにこれらの言語が系統関係にあることを示している。

4.2 多様性の発達

琉球諸語は5つの言語が存在するが、上で述べたように琉球諸語の間の違いも、日本語との違いも大きい。このような違いは語彙更新と語形変化という二つの現象によって生じ、その結果日琉語族が多様な語族に発達してきた。それぞれの地域において古い単語が減び、新しい単語が流行してきたという語彙の更新があり、日琉語族における共通の語彙の数が減少した。もちろん、言語によって使えなくなった単語も新しい単語も異なっている(表1)。一方、保持されてきた単語が音韻変化を受け、時に同源語とは思えないほど語形が変化してきた。文法においても、新しい形式が発達し、現存の形式も音韻変化や類推によって元の体系と大きく異なる体系が発達した(表2)。

表1 語彙の更新

日本語	奄美語 (諸鈍)	沖縄語 (今帰仁)	宮古語 (大神)	八重山語 (波照間)	与那国語
あたま 頭	hamatɕ	tɕimbu	kanamau	amasukuru	mimburu
あか 垢	ɕig.ru	piŋgu	napa	futa.ri	gaba
あに 兄	jakmə	mi:mi:	suta	ɕama	sunati
おじい 祖父	ɸuɕɕu	tʰamme:	upuua	buja	asa
たまご 卵	kʰuga	ɸuga	tunuka	kë:	kaigu

表2 語形の変化

日本語	奄美語 (諸鈍)	沖縄語 今帰仁	宮古語 (大神)	八重山語 (波照間)	与那国語
つき 月	tɕkʰi	ɕitɕi:	ksks	sikəŋ	tʰi:
おも 重い	ʔupsam	ʔubu:ɕeŋ	ivkam	mbusahaŋ	insaŋ
くさ 草	kʰusa	kʰusa:	ffa	ɸutsa	tsʰa:

4.3 多様性の要因

本土の状況と比べて琉球列島の言語多様性は大きく、言語だけでなく、民族・人類学的にも本土との違いが目立つ。先行住民による影響がその要因で、琉球諸語に基層語 (substratum) が存在することがしばしば想定される。つまり、日琉語が琉球列島に入る前に先住民族が定住しており、本土からの移住者が到来してから、その先住民が移住者の言語を取り入れたが、その習得が不完全で先行言語の音韻・語彙・文法の特徴の名残りが新しい言語に加わって、大きな変化の要因となったとする説である。

しかし結論から言うと、そのようなことは充分可能であっても、琉球列島の歴史比較言語学と考古学・人類学の研究成果に合致せず、蓋然性が非常に低い。たしかに琉球列島がオーストロネシア民族の故郷である台湾に近く^{*3}、優れた航海技術^{*4}を持っていたオーストロネシア民

*3 与那国島から台湾が時々見える。

*4 台湾から出発し、フィリピン、インドネシア、ニュージーランド、ハワイ、マダガスカルまで植民し、コロンブスの上陸以前にアメリカ大陸に到達していた可能性も大きい。

族が南琉球に到達していたことは明らかになっている。しかし、オーストロネシア諸語からの借用語等が琉球諸語に認められず、接触があった積極的な証拠が存在しない。

考古学の観点では、南琉球にオーストロネシア文化の考古学的痕跡が発見している (Summerhayes and Anderson 2009) が、琉球列島におけるオーストロネシア文化の繁栄は一時的なものに過ぎず、さらに日琉語の担い手の到来時期より数千年古い。例えばオーストロネシア系とされている八重山群島・波照間島の下田原貝塚しもたぼるの遺跡は4千5百年前に遡るとされているが、日琉語の担い手は「原グスク文化」とともに10世紀前後に到来したと推定されている (安里・土肥 1999, 高宮 2005, Serafim 2003, Pellard to appear)。

また、グスク時代以前、北琉球と南琉球は異なる文化圏をなしており交流がなかったと思われる。例えば北琉球には存在した縄文文化が南琉球にはまったく見られず (安里・土肥 1999)、一方北琉球にはオーストロネシア文化の形跡が発見されていない。

さらに、耕作のなかった先史時代の琉球列島の小さな島々では狩猟採集のみによる生活が困難で、人口がそれほど多くなかったと想定され (高宮 2005)、無人島が多かったと思われる^{*5}。

最近のDNAの研究では琉球列島の住民が本土日本人に系統的に近く、オーストロネシア系の台湾原住民とは特別な関係がないことが明らかになっている (Li et al. 2006, Matsukusa et al. 2010)。先住民がいたとしても、移住してきた日琉民族との婚姻が多くなったであろう。

そもそも、「島」という閉ざされた環境において動物の進化の速度が早いことが観察される (Millien 2006) と同様に、接触・基層語の影響を想定しなくても琉球諸語が多様に発達した原因が「島」という環境にあることが分かる。その他に少人数集団による新天地への植民が言語の変化を引き起こすことが明らかになっている (Atkinson et al. 2008)。

結局、先住民が琉球列島にいたのは確かであろうが、到来した日琉語の担い手におそらく消滅に追いやられたのか、大きな影響を残すほどの人口がなく完全に吸収されたのだろう。

5 琉球諸語の研究からの言語学への貢献

まだ充分研究されていない琉球諸語が言語学に大きく貢献できることが研究が進むとともに明らかになってきた。琉球諸語はめずらしい特徴を示しており、その報告と分析によって言語の類型論に貢献できる他に、日本語の史的研究を大きく発展させる鍵になるとも言える。

5.1 一般言語学と類型論

琉球諸語の音韻に関する研究は文法の研究より遥かに数が多く、すでに興味深い成果が出ている。一例だけを挙げると、筆者が2007年より調査している宮古語大神島方言（沖縄県宮古島市）の音韻体系が独特で世界の諸言語と比較してもめずらしい特徴を示している。

^{*5} 上村 (1997) は「先行言語が必ず存在した」と断言しているが、人類学の観点から見ればそう考える必要がない。

まず、子音の数が非常に少なく、/p・t・k・m・n・r・f・s・v/の9個しかない。日本語の標準語や他の宮古方言はだいたい15個くらいはあるが、大神方言が日本列島の中で最も子音が少ない。世界のなかでも子音が少ない言語といえる。その理由は大神方言では有声阻害音 b・d・g・z が無声化し、無声阻害音と合流した結果、子音の数が3分の2に減ってしまったからである。同じ宮古語の池間方言と比較すると大神方言の無声化現象はよく分かる（表3）。

表3 大神方言における無声化

日本語	宮古語 池間方言	宮古語 大神方言
お腹	bata	pata
男	bikiduy	pikitum
風	kadzi	kati
蚊	gadzaj	katam
左	çidai	putau

さらにめずらしいのは子音の連続である。日本語には子音の連続があまりないのに対し、大神方言には子音が三つ以上続く単語が多い。たとえば「人」/pstu/、「二日」/fkkska/、「引っ張る」/sapsks/のような例である。

もっとも珍しいのは次の特徴である。普通の言語では母音を中心に単語が構成されるが、大神方言はその原理に反する。すなわち、母音がまったくなく、または声帯を振動させて発音される音も一切ない単語がある。これは非常に珍しい特徴で、世界の中でこのような言語は他にモロッコのベルベル・Tashlhiyt 語とカナダの Nuxálk (Bella Coola) 語と Heiltsuk-Oowekyala 語という例しか報告されておらず、アジアでは他にない。

表4 大神方言における無声語

大神方言	日本語
s:	塵・巢・擦る
f:	櫛・降る・噛みつく・閉める
ks:	乳・釣り針・釣る・来る
kf:	作る
ps:	日・女陰
sks	切る
fks	口・建てる
ksks	月・聞く・着く・突く
psks	引く

5.2 日本語史

琉球諸語と日本語が共通の祖先から分岐したのは恐らく弥生時代末期乃至古墳時代^{*6}で、最古の記録を持つ奈良時代の日本語より以前である。したがって、現代の琉球諸語の中に8世紀の日本語の問題を明らかにするデータがある蓋然性が非常に高い。そのみならず、上代以前に日本語から消え去った祖語の特徴が現代琉球諸語に残存している可能性も大きい。

一例だけを紹介すると、日本語史でもっとも注目されてきた問題である「上代特殊仮名遣い」を琉球諸語の観点から眺めると興味深いことがわかる。周知の通り奈良時代の日本語には二種類（甲類・乙類）のイ列・エ列・オ列音節の区別が存在したが、琉球諸語との対応が一見して不規則に見え、上代語を日琉祖語と同一視する文献中心の従来の国語学では説明が与えられていない。

しかし、実は上代語の同じ乙類イ列音節でもさらにその交替のパタンによって二種類に分けられる。一部の乙類イ音節がツキ_乙（月）～ツクヨ_甲（月夜）のようにウ列音と交替するのに対し、キ_乙（木）～コ_乙ノ_乙ハ（木葉）のようにオ_乙列音と交替するものもある。したがって両者が元々二つの異なる音であったと考えられるが、琉球諸語では両者が区別されている（表5）。つまり、上代日本語ではすでに完全に消えかけており、形跡しか残っていなかった音韻の区別がいまだに琉球諸語では保たれている。

表5 乙類イの二つの由来

	「月」	「木」
上代	ツキ _乙 ～ツク	キ _乙 ～コ _乙
諸鈍	t̚ikʰi	kʰi:
今帰仁	ɕitɕi:	ki:
大神	kʰks	ki:
石垣	ts̚iki	ki:
与那国	tʰi:	kʰi:

その他に係結、「アレ」・「ワレ」という二つ一人称代名詞、主格の「ガ」と「ノ」の区別等、琉球諸語が現代標準語から姿を消した古い文法的な特徴が琉球諸語に残存している。語彙の面でも「ト_乙ジ」（妻）のような古語や、「イヲ」（魚）・「イメ_乙」（夢）・「ウモ」（芋）のような古い語形も琉球諸語に見られる（表6）。

^{*6} Pellard (to appear)。ただし、琉球祖語の担い手がその後平安時代まで本土にとどまり、10世紀前後に琉球列島へ南下して行ったと思われる。

表6 琉球諸語における古態の保存

日本語	奄美語 (諸鈍)	沖縄語 今帰仁	宮古語 (大神)	八重山語 (波照間)	与那国語
とし 妻	t ^h utɕ	t ^h udzi:	tuku	tuŋ	t ^h uŋ
魚 イヲ > ウヲ	?ju:	?u:	uu	ju:	iju
夢 イメ > ユメ	?imi	?imi:	imi	imi	imi
芋 ウモ > イモ	?umu	?umu:	m:		unti

6 ことばの多様性を守るために

6.1 「保存」とは

では、このことばの多様性をどのようにすれば守れるのだろうか。「保存」とはどのようなことなのだろうか。ことばを化石化した形で博物館の中で文化遺産として保管することなのか。それとも生きたままで次世代へ継承できるように保護することなのか。それは根本的な問題であるが、次世代へ継承できるように生きたまま保護しないとあまり意味がないと思われる。

6.2 日本の現状

今は地方のことばの研究が支援されており注目も浴びているものの、保護と継承に関しては積極的な政策がまだ取られていない*7。各地方において個人によるそのような活動もしばしば見られるが、大きな規模の政策はまだない。

6.3 保存の方法と実践：学者とコミュニティの協力

保存の具体的な方法であるが、危機言語・方言の保存または復興の活動は地元から発信しなければならない。地方のことばは、それを話している人と習いたい人の努力がなければ消滅してしまう。

言語学者は「我々のことばを救え」と一方的に言われても非常に困るし、逆に言語学者が「あなた達のことばを救ってあげよう」と一方的に活動しようとしても無駄である。言語学者は専門の知識と技術を提供して保存の活動に協力することはできるが、地元の人が熱心にその方言を守ろうとしない限り保存・継承は成功しない。

*7 標準語励行の時代と対照的であるが、意識と態度が変わったのは標準語が広く普及され伝統的な地方の言葉が標準語と対立できる「危険」な存在でなくなった今であるのは示唆が多い。

6.4 言語学者の急務

多くの場合、伝統的なことばが話せるのは高齢者だけで、今記録しないと今後継承も研究も一切できなくなる。したがって、大至急研究を進めなければならない。目指すべき理想の目標は文法書・辞書・テキスト集という3点セットである。今まで日本の危機言語・方言の辞書やテキスト集は、地域によって偏りがあり数も多いと言えないが、ある程度公開されてきた。しかし、文法書はほとんどなく、ことばの全体像を明らかにしないまま、ある特定の文法事項、またはある事項の地理的な分布を研究するのが主流だった。そういう研究には当然価値はあるが、それだけではそのことばの全体の姿がわからないし、そのことばを学習することもまったくできない。

不可欠なのは、各言語・方言の音声と音韻・形態・統合を包括的・体系的に記述した文法書である。琉球語が始まって今100年以上経っているのに、琉球諸語の記述文法書がほとんどないということは我々言語学者の反省すべき問題だと思う。ある方言学者が文法の完全な記述は3年・4年では絶対にできないと断言しているが、そのくらいの時間があれば⁸、完全とは言えない⁹かもしれないが、充分立派な文法記述が書けると思われる。

7 むすびにかえて

日本列島は通常考えられる「日本語」という単一言語の国ではなく、多言語社会と考えた方が妥当である。その単一言語の「方言」と従来見なされてきた多くの伝統的なことばは実に多様で、日本語と親戚関係にありながら日本語とは異なる言語と考えるべきものもある。

日本列島の言語多様性は琉球列島がもっとも大きいのが、深刻な消滅の危機にさらされている。著名な言語学者の服部四郎は、40年ほど前にすでにその危機を感じ、当時の記述研究が不足していたことを無念に思っていた。服部は多様な日本語・琉球諸語の研究が重要であり衰退しつつあると警告しつつつけたが、それ以来状況が改善したとはとても言えない。

2011年3月東日本を襲った大震災は、多くの命を奪ったほか、東北地方の数方言がおそらく大津波とともにこの世から永遠に消え去った。もしこのような震災が琉球列島で起こっていたら、琉球諸語は半減したであろう。実は同程度の地震と津波が18世紀に、琉球列島を襲ったことを忘れてはならない。1771年にM8の地震とその後の大津波によって八重山の人口の3分の1が死亡した。1万人以上の死者とともに、この地域の言語の多様性も波にさらわれてしまった。

やはり日本の言語学でもっとも緊急でかつ重要なのは今まさに消えようとする本土や琉球列島の危機言語・方言の記述である。

⁸ ちょうど大学院生が博士論文を執筆する時間である。

⁹ 完全に記述された言語がそもそもないし、「完全」な記述がはたして可能かどうか疑問である。

参考文献

- 安里進・土肥直美 1999 『沖縄人はどこから来たか——琉球＝沖縄人の期限と成立——』 那覇：ボーダーインク。
- ATKINSON, Quentin D., MEADE, Andrew, VENDITTI, Chris, GREENHILL, Simon J. and PAGEL, Mark. 2008. Languages evolve in punctuational bursts. *Science*, 319(5863): 588.
- 平山輝男（編）1988 『南琉球の方言基礎語彙』 東京：桜楓社。
- KRAUSS, Michael E. 1992. The world's languages in crisis. *Language*, 68(1): 4–10.
- ローレンスウェイン 2006 「沖縄方言群の下位区分について」 『沖縄文化』 40(2/100): 101–118.
- LI, Shi-Lin, YAMAMOTO, Toshimichi, YOSHIMOTO, Takashi, UCHII, Rieko, MIZUTANI, Masaki, KURIMOTO, Yukihide, TOKUNAGA, Katsushi, JIN, Feng, KATSUMATA, Yoshinao and SAITOU, Naruya. 2006. Phylogenetic relationship of the populations within and around Japan using 105 short tandem repeat polymorphic loci. *Human Genetics*, 118(6): 695–707.
- MATSUKUSA, Hiroataka, OOTA, Hiroki, HANEJI, Kuniaki, TOMA, Takashi, KAWAMURA, Shoji and ISHIDA, Hajime. 2010. A genetic analysis of the Sakishima islanders reveals no relationship with Taiwan aborigines but shared ancestry with Ainu and main-island Japanese. *American Journal of Physical Anthropology*, 142(2): 211–223.
- MILLIEN, Virginie. 2006. Morphological evolution is accelerated among island mammals. *PLoS Biol*, 4(10): e321, 09.
- 宮城信勇 2003 『石垣方言辞典』 那覇：沖縄文化協会タイムス社。
- 仲宗根政 1983 『沖縄今帰仁方言辞典』 東京：角川書店。
- 大城健 1972 「語彙統計学（言語年代学）的方法による琉球方言の研究」 服部四郎先生定年退官記念論文集編集委員会（編）『現代言語学』 東京：三省堂，533–558。
- PELLARD, Thomas. 2009. *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.
- PELLARD, Thomas. to appear. The linguistic archaeology of the Ryukyu Islands. In HEINRICH, Patrick, MIYARA, Shinshō and SHIMOJI, Michinori (eds.). *Handbook of the Ryukyuan languages*, Mouton de Gruyter.
- SERAFIM, Leon A. 2003. When and from where did the Japonic language enter the Ryukyus? アレキサンダー・ボビン・長田俊樹（編）『日本語系統論の現在』 京都：国際日本文化研究センター，463–476。
- SUMMERHAYES, Glenn R. and ANDERSON, Atholl. 2009. An Austronesian presence in southern Japan: Early occupation in the Yaeyama Islands. *Bulletin of the Indo-Pacific Prehistory Association*, 29: 76–91.
- TAJIMA, Atsushi, HAYAMI, Masanori, TOKUNAGA, Katsushi, JUJI, Takeo, MATSUO, Masafumi, MARZUKI, Sangkot, OMOTO, Keiichi and HORAI, Satoshi. 2004. Genetic origins of the Ainu inferred from combined DNA analyses of maternal and paternal lineages. *Journal of Human Genetics*, 49: 187–193.
- 高宮広土 2005 『島の先史学——パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代——』 那覇：ボーダーインク。
- 上村幸雄 1997 「琉球列島の言語：総説」 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『日本列島の言語』 東京：三省堂，311–354。